

Yama no hana
山ノ鼻2号墳



1993

福岡市教育委員会

序

古来から大陸文化の窓口として新たなる文物を受容してきた博多湾周辺の地域には、数多くの遺跡が点在し、そこには交流を物語る遺物が数多く残されています。

福岡市の西部にある狭長な今宿平野には、朝鮮半島との交渉史を解き明かすうえで重要な前方後円墳が12基もあります。これらの前方後円墳群は4世紀から6世紀までの300年間に亘って造営され続いたもので、博多湾に面する平野を支配した首長層の清長と古墳時代の社会体制を解き明かす一翼を担っています。

山ノ鼻2号墳は、今宿平野に所在する12基の前方後円墳中でも初期に位置づけられる全長80mの前方後円墳です。墳丘は近世墓の建立や開墾によって大きく改変され、埋葬主体部は消失していますが、今宿平野における前方後円墳の系譜を考えるうえでは極めて貴重な古墳です。

福岡市教育委員会では、重要遺跡確認調査の一環として今宿平野における前方後円墳群の系譜解明とその位置づけに取り組み、今宿大塚古墳・鋤崎古墳・山ノ鼻1号墳について1990~91(平成2~3)年の2ヶ年に亘って山ノ鼻2号墳の確認調査を行ないました。その結果、埋葬主体部は未検出ながら墳丘の形態と規模が判明しました。

本書は、この発掘調査成果を収録したものです。本書が皆さんに広く活用され、埋蔵文化財に対するご理解の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査に当たってご指導・ご助言をいただいた諸先生方を始め、多くの方々のご協力をいただきました。殊に、この地に祖先の御靈を祭っておられる徳永地区の地権者各位には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成5年1月10日

福岡市教育委員会
教育長 井口 雄哉

目 次

I.はじめに	1
II.立地と歴史的環境	3
III.墳丘	8
1) 前方部	10
2) 西側くびれ部	13
3) 後円部	15
IV.おわりに	22

れ い げ ん

- 本書は、1990~91年度に福岡市教育委員会が、福岡市西区大字徳永で重要遺跡確認調査として実施した山ノ鼻2号墳の調査記録である。
- 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 本書に掲載した遺構の実測と製図は小林義彦と大塚紀宜。尾園晃が行なった。
- 本書に掲載した遺構の写真は小林が撮影した。
- 本書の執筆は、I・II章は小林、III章は大塚と尾園、IV章は三者が合議して行なった。
- 本書の編集は小林、大塚が行なった。

遺跡調査番号：9060	遺跡番号：YHK-2	分査地図番号：120-B-3
調査地籍：福岡市西区大字徳永字山ノハナ		
調査対象面積：5,000m ²	調査実施面積：180m ²	
調査期間：1991年1月17日～2月28日、1992年1月13日～3月23日		

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

山ノ鼻2号墳は、福岡市西端の今宿平野にある全長約80mの前方後円墳で、福岡市西区大字徳永字山ノハナに所在する。古墳は、高祖山から派生する低丘陵端の段丘上に立地し、段丘端にむかって前方部を配する。昔日より本古墳は、東に並立する山ノ鼻1号墳や南接する若八幡宮古墳とともに古式の前方後円墳として一群をなすのではとの説が説かれていた。しかしながら墳丘は、昭和初年頃に建立された墓碑群や開墾されて畠地と化し、くびれ部と前方部の一部を除いては改変されていた。殊に、後円部の消失には甚だしいものがある。そのため古墳のデータは分布調査時の所見を除いては一切なく、詳細はほとんど知られていなかった。

福岡市西端にある狭長な今宿平野には、この山ノ鼻2号墳をはじめとして12基の前方後円墳があり、これら前方後円墳群の発生と系譜の解明及びその歴史的位置づけが求められていた。山ノ鼻2号墳は、その基礎的データ収集のため重要遺跡確認調査の一貫として調査を実施した。この今宿古墳群における重要遺跡確認調査は、今宿大塚古墳、鋤崎古墳、山ノ鼻1号墳に続くものであり、ほかに若八幡宮古墳と丸隈山古墳が調査されている。

発掘調査は、墳丘の規模や構造及び内部主体等の基礎データ収集を主眼とし、墳丘の各部にトレーニングを設定して実施した。調査の結果は、本書にその概要を示すが、殊に墳形についての新知見は今宿平野における前方後円墳の発生と展開を考える上で貴重な事例となろう。

なお発掘調査にあたっては、農道や畠地へのトレーニング設定が必要となり、徳重鶴氏や富永昇一氏をはじめとする地権者の方々にお許しいただいた。調査・報告が事無く終えたのは地権者をはじめとする方々のご理解とご協力によるものである。ここに記して感謝の意を表します。

2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口 雄哉 文化財部長 花田亮一

調査總括 福岡市教育委員会埋蔵文化財課 課長 折尾 学

庶務担当 飛高憲雄（第1係長） 中山昭則

調査担当 小林義彦

調査補助 大塚紀宣、尾園 晃（九州大学）

調査・整備作業 大瀬良清子、金子由利子、久保喜代子、坂田美佐子、柴田タツ子

柴山常人、土斐崎孝子、馬場イツ子、藤長幸子、堀 ウメコ、松井フユ子

松本藤子、百武義隆、門司弘子

なお、発掘調査と整理報告にあたっては、柳沢一男（宮崎大学）、山崎純男の諸先生方の貴重な指導・助言を賜わった。



- | | | | |
|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1 山ノ鼻2号墳 | 2 山ノ鼻1号墳 | 3 若八幡宮古墳 | 4 下谷古墳 |
| 5 丸隈山古墳 | 6 飯氏二塚古墳 | 7 飯氏B14号墳 | 8 女原C14号墳 |
| 9 今宿大塚古墳 | 10 谷上B1号墳 | 11 本村A1号墳 | 12 銅塔古墳 |
| 13 飯氏(兜塚)古墳 | | | |

Fig. 1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

II. 立地と歴史的環境

山ノ鼻 2号墳のある今宿平野は、福岡市の西端、玄界灘に面して開けた糸島平野の東北縁に位置する。この今宿平野は、北を今津湾に面してのびる海岸砂丘に、南を高祖山山塊によって画される東西長 3 km、南北幅 1 km 程の狭長な小平野である。また、東は叶岳から長垂山とつづく小山塊によって早良平野と遮られ、西は糸島平野にむかって開口する。平野の東部には、高祖山から流れ出た小河川が小さな扇状地を造り出し、西部には砂丘後背地のラグーンが抜がっている。

今宿平野の属する糸島平野は、旧制下の怡土郡と志摩郡からなり、かつては北へ突出した半島の基部に糸島水道が東西に貫流していた。平野は、後背に連なる背振山系から派生した丘陵群によって幾つかの小地域（小平野）に両され、長野川、雷山川、瑞梅寺川等の河川が北流して玄界灘に流れ込んでいる。

この糸島平野には、42基の前方後円墳があり、それぞれの河川流域ごとに一群をなしている。つまり、(1)：糸島平野西部の長野川流域に分布する一貴山銚子塚古墳等の一群、(2)：瑞梅寺川・雷山川流域の旧伊都國の中心域に分布する瑞山古墳等の一群、(3)：河原川東岸の今宿平野に分布する丸隈山古墳等の一群、(4)：糸島半島南部の泉川流域に分布する御道具山古墳等の一群の 4 群にグルーピングできるが、全長 103m の一貴山銚子塚や 85m の丸隈山古墳を除いては総じて小規模なものがほとんどである。

これらの前方後円墳群は、4世紀前半～後半にかけて群ごとに造営が開始されるが、その展開や消長は各流域によって異なる。今宿平野の古墳群が 6世紀後半まで首長墓として系譜的

No.	古墳名	所 在 地	立地	全長(m)	蓋石	埴輪	埋葬施設	出土遺物・その他
1	山の墓 1号	福岡市西区德永	丘陵上	50	○		横穴式石室？	獸面鏡片
2	山の鼻 2号	福岡市西区德永	段丘上	75	○		横穴式石室？	墳丘破壊
3	若八幡宮	福岡市西区德永	丘陵端	(48)	○		木棺直葬	三角縁神像鏡、碧玉製管玉、ガラス小玉、環頭大刀、鐵劍、刀子、堅柄板革頭刀甲、銅製有孔円筒、土師器
4	下谷	福岡市西区德永	丘陵上	?			横穴式石室？	墳丘破壊
5	丸隈山	福岡市西区瑞梅寺	丘陵端	84.6	○	○	横穴式石室	彷彿鏡 2、巴形銅鏡、碧玉製勾玉、翡翠製管玉、ガラス小玉、鐵劍、直刀、鐵鏡
6	飯氏二塚(子拾塚)	福岡市西区飯氏	段丘上	53			横穴式石室？	須恵器、埋葬施設破壊
7	飯氏 B-14号	福岡市西区飯氏	丘陵上	24			横穴式石室	
8	小松原	福岡市西区女原	丘陵上	24			横穴式石室？	墳丘半壊
9	今宿大塚	福岡市西区今宿	段丘上	64	○	○	横穴式石室？	埴輪、須恵器、陶質土器
10	谷上 B-1号	福岡市西区今宿	丘陵上	28			横穴式石室	
11	本村 A-1号	福岡市西区今宿青木	丘陵上				横穴式石室	墳丘破壊
12	鷺崎	福岡市西区今宿青木	丘陵端	62	○	○	横穴式石室	鏡 6(船軌 2、彷彿 4)、掛鏡 2、勾玉、管玉、ガラス玉、滑石、翡翠製大刀、直刀、劍、鐵刀、鐵手刀子、鐵
13	飯氏(完塚)	福岡市西区飯氏	段丘上	31	○	○	横穴式石室	鏡(径 5 寸)、猪の金具

Fig. 2. 今宿平野の前方後円墳一覧

に継続するのに対し、泉川流域に分布する一群は5世紀中葉頃に途絶してしまい、政治的、経済的社会基盤の脆弱性を窺わせる。

この中で山ノ鼻2号墳のある今宿平野には、本墳をはじめとして12基の前方後円墳が高祖山から派生する丘陵上や段丘上に立地し、その後背する高祖山北麓には300基以上的小円墳が群集している。この12基の前方後円墳は、墳丘規模等から山ノ鼻1号墳、2号墳、若八幡宮古墳、下谷古墳、丸隈山古墳、飯氏二塚古墳（子捨塚）、今宿大塚古墳、鋤崎古墳等の一群と飯氏B14号墳、女原C14号墳（小松原古墳）、谷上B1号墳、本村A1号墳等の一群とに分けられる。前者の8基は、丸隈山古墳の85mを最大として墳長が50mを越えるもので、丘陵上に独立的に造営されるものである。埋葬主体も若八幡宮古墳は木棺直葬であり、鋤崎古墳や丸隈山古墳は導入期の横穴式石室である。また、副葬遺物も銅鏡や玉類の装飾品をはじめ堅矧板革綴短甲、鉄剣、鉄鎌等の武具や鐵斧、刀子等の工具類と多岐にわたり、質量ともに豊富である。これに対して後者の4基は、墳長が30m未満の小型の前方後円墳で、群集墳中に混在して立地する。埋葬主体は両袖形横穴式石室で、6世紀後半代以降に造営されたものである。このように両者の間には隔世の差異が認められる。つまり、前者の大型古墳は、今宿平野における盟主的な同一系譜上の首長墓として、後者の小型古墳は後期にいたって急速に勃興する群集墳中の盟主層として位置づけられる。

一方、古墳時代の集落遺跡としては、大塚遺跡や女原遺跡等がある。いずれも6～7世紀の集落址で、20～40棟の堅穴住居址と掘立柱建物址群からなり、谷に入りこんだ丘陵の緩斜面上に立地する。

同時に海岸部では製塩、山麓部では須恵器と鉄の生産が行なわれている。

磨製石斧の生産工房址として著名な今山遺跡下の海岸砂丘では布留併行期の製塩土器が多数出土している。製塩炉址は未検出ながらも塩生産の証左となるものである。

高祖山北麓には、須恵器窯址の新聞窯址がある。窯址の規模や生産の継続期間等は確定していないが、生産開始期は第Ⅰ型式期に遡ることが明らかにされている。また、この山麓一帯の谷間には20ヶ所にのぼる鉄滓の散布地が確認されており注目される。今宿平野を含む玄界灘一帯は、良質な砂鉄を産する花崗岩地帯であり、その砂鉄を素とした鉄生産で、その開始は6世紀後半代と推定される。山麓に分布する群集墳中にはこの鉄滓を供献した古墳もあり、工人集団との関わりを示唆するものであろう。

このような活発な生産活動は、平野に展開する古墳群の生成基盤を支えた証左例となるものであろう。

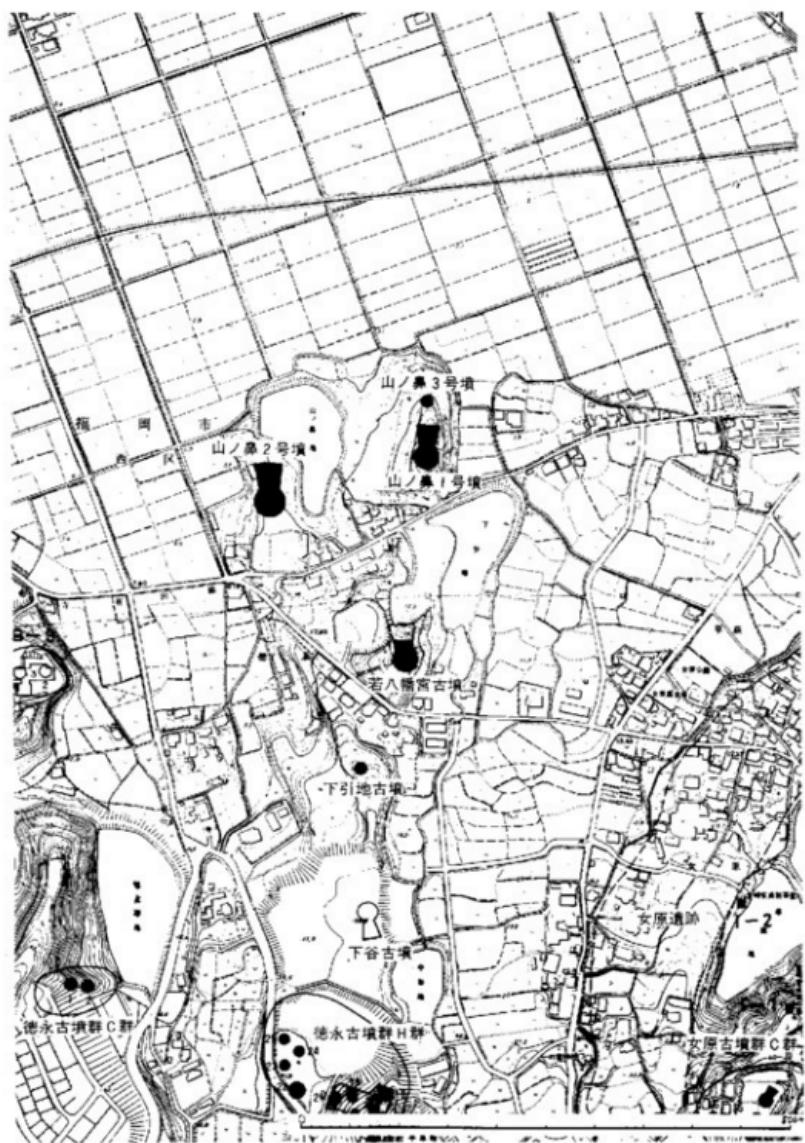


Fig. 3. 山ノ鼻 2号墳位置図(1/6000)



Fig. 4. 山ノ鼻2号墳周辺図(1/1000)



Fig. 5. 山ノ鼻 2号填填丘実測図 (1/600)

III. 墳丘

山ノ鼻2号墳は標高416mの高祖山から北にのびた丘陵の先端に立地する。墳丘は、若八幡宮古墳、下谷古墳、山ノ鼻1号墳などが位置する丘陵尾根から、若八幡宮古墳付近で分岐して北に延びる低段丘状にあり、前方部を北に向けた前方後円墳である。尾根筋にはこの地にも数十基に及ぶ群集墳が散在している。現況では山ノ鼻1・2号墳と若八幡宮古墳の間に今宿バイパスが通り、原地形は切り通しのために大きく改変されている。

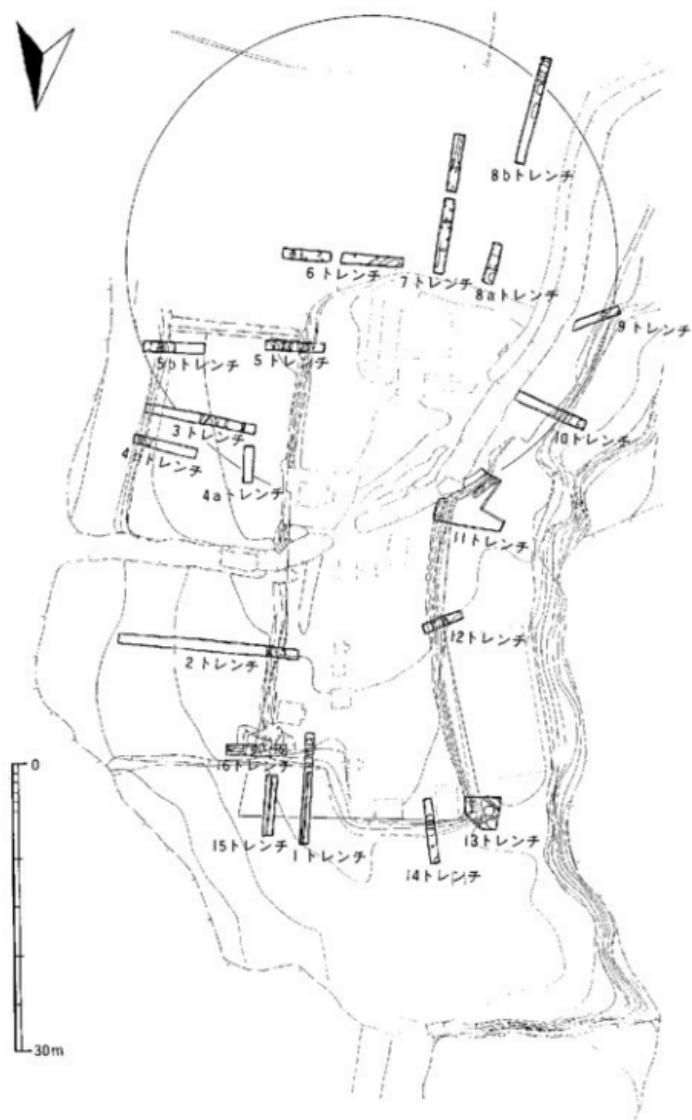
墳丘は開墾による削平が著しい。後円部南半分と墳丘東側は畑の耕作によって地山面を大きく削っている。従来は現況でわずかに残る後円部北半分と前方部によって墳丘規模を推定してきたが、墳丘周囲は耕作により大きく削られて墳丘範囲を狭められ、墳丘上も近世以降墓地として利用されており、東側くびれ部や埋葬主体は完全に削られている。前方部東側隅角も、畑の耕作のために削平されている。

今回、墳丘地山面の比較的残りの良かった墳丘西側は牛舎や農道が墳丘のラインに沿う形で作られているために破壊を免れたと思われる。このため、墳丘の推定復元も西側を中心として行っている。

調査は前方部東側に1トレンチを設定し、以下原則として右回りに16トレンチまで設定して墳丘規模の確認に努めた。



Fig. 6. 山ノ鼻2号墳全景(南より)



1). 前方部

12トレーニング (Fig. 8)

11トレーニングと13トレーニングのほぼ中間に設定した。現存する墳丘の前方部の西縁はほぼ中間にあたり、西側くびれ部から前方部へつながる位置にある。トレーニング西半分は平坦で、中央部より東側はかなり急な角度で立ち上がり、墳丘の整形面と思われる。立ち上がった斜面からは一段目の基底部が続いている。傾斜面と墳丘基底面との間には浅い溝があり、11、13トレーニングの溝と対応する形になっている。一段目基底部、墳丘基底面のレベルはそれぞれ、9.5m、8.3mとなり、ともに11・13トレーニングのレベルと対応することから、この地点での墳掘部の位置が確定できる。

13トレーニング (Fig. 9・10)

前方部西側の隅角の位置にあたる。現存する墳丘部の北西隅にあたる部分にトレーニングを設定した。発掘の結果、前方部整形時の削り出しによる北西角の隅角と思われる部分が確認され、同時にそれに伴う溝が検出された。トレーニング南西部に比較的顕著に確認される溝状の造構は12トレーニングの溝状造構に連続するものと思われる。また、トレーニング北東部に東西方向にのびる溝状造構は前方部前縁を規定するものとして14トレーニングの溝状造構に連続すると考えられる。墳丘基底面に掘乱壙が3基確認され、いずれも後世の埋葬土壙と推定される。墳丘整形面は東西方向、南北方向のいずれも隣接する12・14トレーニングの整形面と対応する方向に向かっており、これらの整形面が一体となっていることを証明している。これらのことから、この位置が前方部隅角となる可能性はきわめて高いと考えられる。基底面のレベルは墳丘基底部が8.0m前後、一段目基底部が8.8mとなる。

14トレーニング (Fig. 11・12)

現存する墳丘部の前方部中央やや西よりにトレーニングを設定した。発掘の結果、地山整形面と思われる急斜面と、それに平行な溝状造構を検出した。急斜面は地山整形面の可能性があるが、本来の斜面からは若干削られていると思われ、多少歪つになっている。溝状造構は整形面からほぼ垂直に落ち込み、緩く立ち上がって墳丘基底部に続く形で位置する。墳丘の基底面に二ヵ所の比較的大きな掘乱土壙があり、どちらも後世の埋葬造構と考えられる。北側の掘乱土壙からは火葬墓に伴う骨壺が出土した。基底面のレベルは墳丘基底面

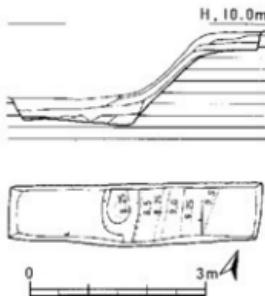


Fig. 8. 12トレーニング実測図 (1/100)

13トレーニング土壤色									
1. 墓地褐色	6. 明赤褐色								
2. 黄褐色	7. 黄褐色								
3. 赤褐色	8. 赤褐色								
4. 明赤褐色	9. 明褐色								
5. 茶褐色	10. 明褐色								

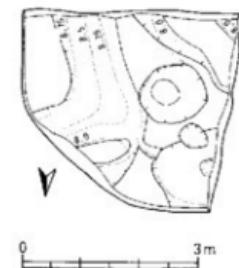


Fig. 9. 13トレーニング実測図 (1/100)

が8.3m、一段目が8.7mとなる。

15トレンチ

1トレンチのやや東側に、南北方向にトレンチを設定した。開墾によるものと思われる削平が激しく、水路状の溝を検出したのみで、埴丘築造時のものと思われる遺構を検出することはできなかった。トレンチ内のレベルは最も低い箇所で7.8mをはかる。

16トレンチ (Fig. 13)

15トレンチの南側に東西方向に設定した。現存する埴丘の東側隅角にあたる。発掘の結果、埴丘基底面と一段目の基底部を確認することができた。現況の地形からトレンチの北側にかけては後世に削平を受けたと考えられたが、トレンチ北側の斜面もこれに伴うものと考えられ、本来はさらに北側まで埴丘が続いていたことが予想される。一段目基底部から東側に続く緩斜面はいったん平坦面に続き、さらに緩い段差があり埴丘基底部に続く。埴丘基底面の東半分は開墾による改變が施され、浅い溝状になっている。基底面のレベルは埴丘基底面が8.4m、一段目基底部が9.0mになる。

1トレンチ (Fig. 14)

前方部東よりの位置に設定した。現況図に見られるように、前方部のこの部分は後世の開墾によりかなり削平されており、地山まで削られているようで、古墳

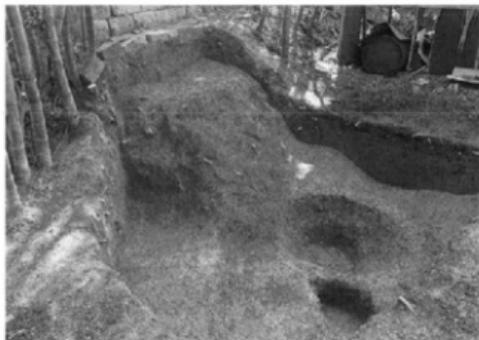


Fig. 10. 13トレンチ全景(北西より)



Fig. 11. 14トレンチ全景(北より)

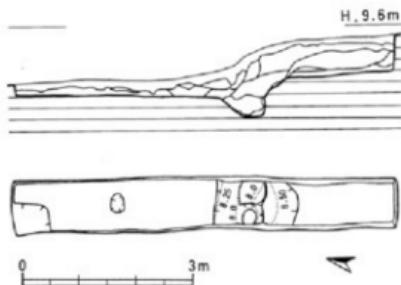


Fig. 12. 14トレンチ実測図(1/100)

本来の地山整形による立ち上がりは現在残る傾斜面よりも北側にあったものと考えられる。

13・14トレンチをもとにした前方部の推定填丘線上に合う地山の傾斜は見られなかった。

2トレンチ (Fig. 14)

前方部東斜面ほぼ中央に設定した。トレンチ東側は畠の開墾による削平を受けている。

地山にも影響を受けているようだが、東側平坦部分が粘質土をブロック状に含む土か、含まない硬い土であるのに対し、西側の斜面と上の高まりの部分の直上は、薄くはあるが粘質土層が残っており、本来の地山整形面を残していると考えられる。前方部東側の填丘一段目斜面の地山整形痕としてとらえられよう。一段目地山整形面の上部のレベルは9.5~9.6m、基底部は8.6m~8.8mである。

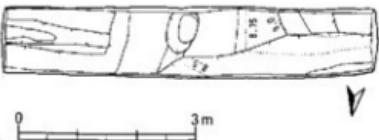
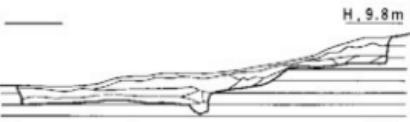
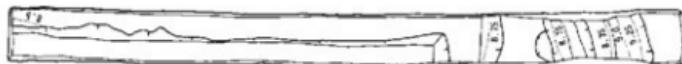


Fig. 13. 16トレンチ実測図 (1/100)



1トレンチ



2トレンチ

Fig. 14. 1・2トレンチ実測図 (1/100)

2). 西側くびれ部

IIトレンチ (Fig. 15・16)

西側くびれ部にあたる位置にトレンチを設定した。残存する墳形でもくびれ部の状況は良好に観察でき、調査前からその位置が想定された。調査の結果、くびれ部と、後円部につながる溝状遺構を確認した。トレンチ設定区域の南東側は水路の開削工事のため、

大きく削られており、原型をとどめない。このため、前方部と後円部の一段目基底部のつながりは確認することができなかった。

北側の前方部から続く地山整形面は傾斜角、墳丘基底面と一段目のレベルとも12トレンチときわめてよく類似しており、両者が連続していることと、墳丘築造当時の様相を残していることを示すものである。地山整形面との境界付近の基底面にわずかに周囲より低い部分が見られ、12トレンチの溝状遺構と関連するものと考えられる。前方部から続く基底面のレベルは墳丘基底部が8.3m、一段目が9.6mとなっている。

南側の後円部に続く地山整形面は前方部の地山整形面と緩い角度で接して西南方向へ延びている。墳裾部分の前面には幅1m弱のごく浅い溝状の遺構が確認された。前方部と後円部の地山整形面の傾きはほぼ等しく、比較的急な斜面を形成している。後円部に続く基底面のレベルは墳丘底部が8.3m、一段目が9.0mとなっている。

The figure consists of two parts. The top part is a longitudinal profile diagram showing a cross-section of the trench. It includes a vertical scale on the right labeled 'H. 10.0m' and a horizontal scale at the bottom. The profile shows several layers of soil, with numbers 1 through 6 indicating specific soil types. The bottom part is a plan view of the trench area, labeled 'A'. It shows the irregular shape of the excavation, various soil layers, and a vertical scale bar on the right ranging from 0 to 3 meters.

Fig. 15. IIトレンチ実測図 (1/100)

A black and white photograph showing the full view of the II trench excavation. The trench is a deep, narrow U-shaped cut into the earth. The walls of the trench are relatively straight but show signs of erosion and different soil layers. The floor of the trench is uneven. A large, dark, irregular shape, possibly a piece of debris or a shadow, is visible on the right side of the floor. The overall scene is one of a well-documented archaeological excavation site.

Fig. 16. IIトレンチ全景 (北西より)



Fig. 17. 山ノ鼻 2号墳全景



Fig. 18. 西側くびれ部・後内部全景

3). 後円部

3 トレンチ (Fig. 19・21)

後円部東側北よりに東西方向に設定した。現況では畠地となっていることから、地山がかなりの削平を受けていると考えられる。地山はトレンチの西側で4トレンチの基底面とはほぼ同じレベル高であり、縦斜面が東に向かって続いている。トレンチ中央やや西側の2本の溝状遺構、東側の擾乱遺構などは後円部墳壙推定線に一致しないことから後世の開墾によるものと考えられる。レベルは東側の最も高い地点で9.0m、中央部の溝状遺構の底部で8.7m、西側の最も低い地点で8.3mである。



Fig. 19. 3 トレンチ墳丘標整形面

4 トレンチ (Fig. 20・22)

現存する墳丘の東側に南北方向に4a、東西方向に4bトレンチを設定した。4aトレンチは後円部東側北寄り、くびれ部と推定される位置の近くに南北方向に設定したが、後世の畠の開墾により、完全に削平されており、地山から薄い土層の上にすぐ表土がある。調査時に3トレンチから連続すると推定された溝状遺構をはじめ、明確な遺構は確認されなかった。トレンチ内のレベルは9.0mをはかる。

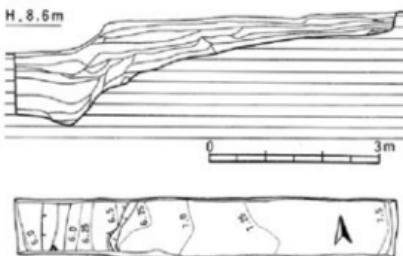


Fig. 20. 4-bトレンチ実測図(1/100)

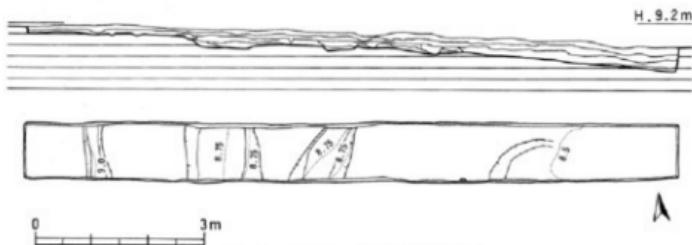


Fig. 21. 3 トレンチ実測図(1/100)

4 bトレンチは後円部北東側に東西方向に設定した。西半分は現況では畠地になっており、なだらかに削平されている。東側は池岸に向かって緩斜面を形成しており、池際で大きく落ちこんでいる。段落ちによる急斜面の前縁に浅い溝状の遺構が検出された。現在の地山整形面の上には古墳に伴う地山整形痕は現状では確認できなかつた。西側に見られる現在の段落ちは後世の開墾によるものと推定される。トレンチ内のレベルは西側の最も高い地点で8.5m、西側落ち込みの最も低い部分で6.8mをかる。

5 トレンチ (Fig.23・24・25)

現存する墳丘の南東部部分に東西方向に走るトレンチを設定し、西側を5 aトレンチ、東側を5 bトレンチとする。5 aトレンチは現存する墳丘から畠に段落ちする地点に設定した。調査の結果、地山整形による緩斜面と、溝状遺構2本を検出した。緩斜面は2カ所あり、トレンチの西側と東側の両端に位置する。西側の緩斜面はなだらかに西側の溝状遺構に落ち込む形になる。溝状遺構は2本あり、それぞれ南北方向に続く形になっている。土層の堆積状況から判断すると、両方の溝状遺構は同時期には存在しなかつたと思われる。現況

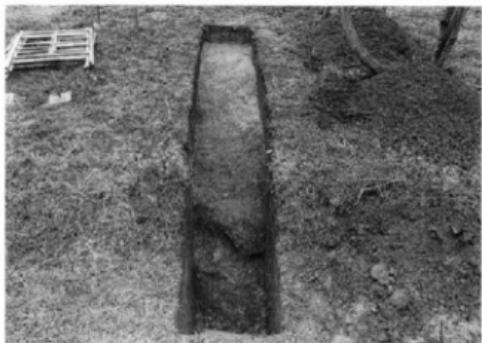


Fig. 22. 4-bトレンチ全景(東より)



Fig. 23. 5-aトレンチ土層断面(北より)



Fig. 24. 5-bトレンチ土層断面(南東より)

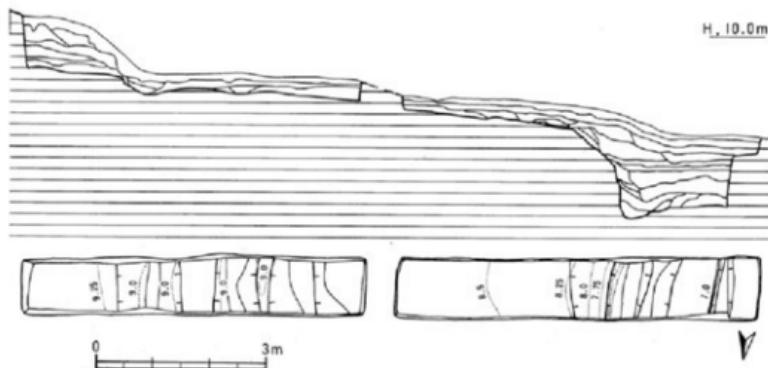


Fig. 25. 5-a・bトレンチ実測図(1/100)

の畑地の境界付近に溝状遺構が位置しており、後世の改変によるものである可能性が高い。5 aトレンチ内のレベルは、西端の最も高い地点で9.4m、東端の最も低い地点で8.8mをはかる。

5 bトレンチは現況の畑地から池岸の際まで設定した。西側が平坦面で、中央部から急傾斜して溝状に落ち込み、わずかに立ち上がり平坦面となる。北側に隣接する

4 bトレンチの状況とはほぼ一致する



Fig. 26. 6-aトレンチ全景(西より)

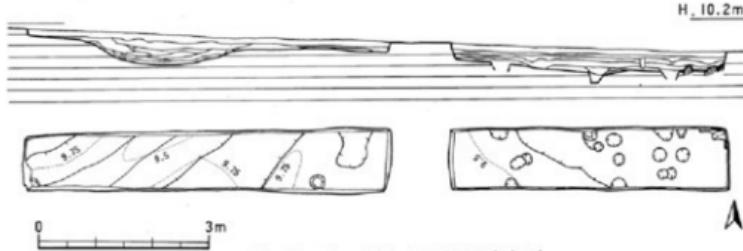


Fig. 27. 6-a・bトレンチ実測図(1/100)

ことから両者が同じ状況で削平された可能性が高い。トレンチ内のレベルは西半分の平坦面が8.3m~8.6m、落ち込み前縁の溝状遺構の最も深い地点で6.8mをはかる。

6 トレンチ (Fig. 26・27)

現存する墳丘の南東側に東西方向に設定し、西側を6aトレンチ、東側を6bトレンチとした。6aトレンチでは西側に北東~南西方向に延びる溝状遺構が検出された。溝の幅は約1.5mで、40cm程度の深さがある。溝の走る方向は残存する墳丘の後円部分の区画にはほぼ平行する。当初、墳丘裾部の区画溝と推定されたが、位置的に適合せず、後世のものと推定した。トレンチ内のレベルは、北西隅の地点で10.0m、溝の底部で9.5m、東側の平坦部分で9.7mをはかる。

6bトレンチは6aトレンチの東に隣接する位置に設定した。トレンチ内からは墳丘築造につながる遺構は見られず、小ピットが数か所で検出されるにとどまった。ほぼ平坦な面が続いており、レベルは全面を通じて9.5~9.3mをはかる。

7 トレンチ (Fig. 28・29)

現存する墳丘の南側に南北方向にトレンチを設定し、北側を7aトレンチ、南側を7bトレンチとした。7aトレンチは北半分で平坦面が続き、中央部やや北で緩く傾斜して段落ちの平坦面に続く。中央やや北の傾斜面は隣接する6aトレンチの溝に連続する可能性が高い。また、中央部がやや凹地状になっており、本来溝状であったとも推定しうる。トレンチ西側には南北に走る溝状の擾乱が確認され、またトレンチ内には数か所の小ピットが検出された。トレンチ内のレベルは北側の最も高い地点で10.1m、中央部の最も低い地点で9.8mをはかる。



Fig. 28. 7-a+b トレンチ全景(南より)

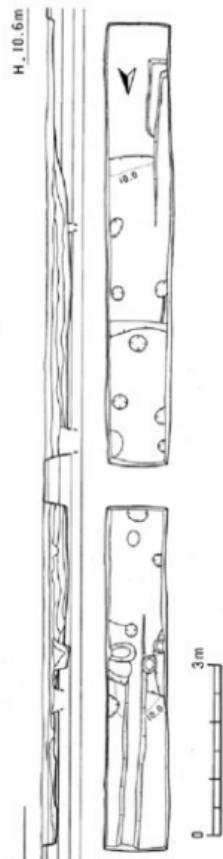


Fig. 29. 7-a+b トレンチ
実測図(1/100)

7bトレンチは7aトレンチを南方向に延長する位置に設定した。北半分はやや低い平坦面が続き、トレンチ中央部でわずかに緩く立ち上がって南側の平坦面に続く。南北に走る溝状の擾乱壙と数カ所の小ピットが確認されただけで、他には遺構は検出されなかった。レベルは北側で9.8m、南側で10.0mをはかる。

8トレンチ (Fig. 30・31・32)

7トレンチの西側に隣接して南北方向に設定し、北から8a、8bトレンチとした。8aトレンチは現存する墳丘の北側に隣接する位置に設定した。北半分は平坦面で、南に緩く傾斜して一段低い平坦面に続く。平坦面や緩斜面の様相は隣接する7aトレンチの状況にはほぼ同じである。レベルは北側の段で10.0m、南側の段で9.7mとなる。

8bトレンチは8aトレンチの延長上に、7トレンチ設定区域以南の地山の状況を確認するため設定した。北側は平坦面で、南側に溝状の遺構とそれに続く緩い立ち上がりが確認された。溝状遺構は幅約1m、深さ約30cmをはかる。溝状遺構はその位置からみて、墳丘整形の際の丘尾切断時の溝と考えられる。レベルは北側平坦面で10.0m、溝の底部で9.6mをはかる。

7、8トレンチによる後円部の地山整形痕の確認では、8bトレンチ南側の溝状遺構を確認するのみにとどまった。この結果、後円部南側外縁の位置は残存する墳丘よりもはるかに南側に広がる

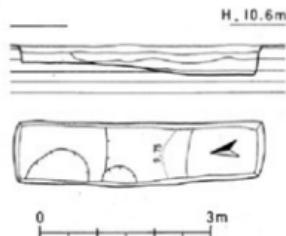


Fig. 30. 8-aトレンチ実測図(1/100)



Fig. 31. 8-bトレンチ土層断面(南西より)

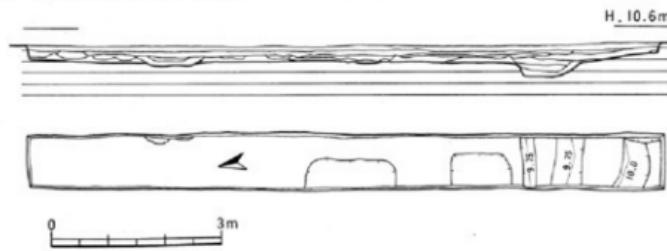


Fig. 32. 8-bトレンチ実測図(1/100)

ものと考えられる。

9 トレンチ (Fig. 33・34)

後円部西側に位置して北東—南西方向に設定した。残存する墳丘とは水路を隔てて西に隣接した位置にある。現況では東半分が農道にかかり、西半分が緩い斜面になっている。調査の結果、トレンチ東側半分の農道の下になっている部分は平坦面になっており、現況では緩斜面となっている。西側に比較的落差の大きい段落ちがあって一段低い平坦面に続く。この段落ちによる急斜面が墳丘整形時の削り出しによる地山整形面と推定され、西側の一段低い面を墳丘基底部、東側の一段高い面を一段目の基底部と推定できよう。また、北西隅に落ち込みの一部が確認されるが、これが墳丘築造時のものとされるかどうかは不明である。

基底面のレベルは墳丘基底部が8.0m、一段目基底部が9.0mになり、墳丘基底面が他のトレンチで確認されたレベルに比べて若干低めであるが、これは丘陵周辺部という現地形に影響されたものと考えられる。

10 トレンチ (Fig. 35・36)

後円部西側に位置して東西方向に設定した。9 トレンチと同じく、東側が農道にかかっており、西側は緩斜面になっている。調査の結果、東半分に一段目と思われる基底部の平坦面が続き、西半分に比較的急な傾斜面とそれに続く基底部がある。9 トレンチと同様、傾斜面が地山削り出しによる地山整形面であると考えられる。地山整形面の傾斜角度は隣接する9 トレンチ、11 トレンチとほぼ同じで、

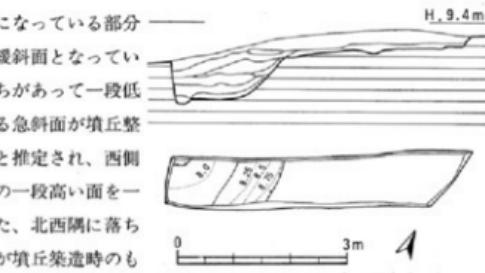


Fig. 33. 9 トレンチ実測図 (1/100)



Fig. 34. 9 トレンチ墳壠部(北西より)

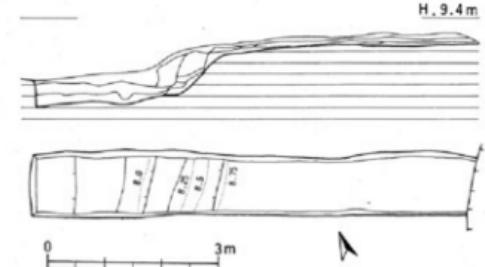


Fig. 35. 10 トレンチ実測図 (1/100)

これらのトレンチで確認された地山整形面が連続していることを示している。墳壠部前縁にごく浅い溝状の遺構が確認され、11トレンチ南側の溝に連続する可能性がある。レベルは墳丘基底部が8.0m、一段目基底部が8.9mとなっている。

後円部の墳壠線の復元は、地山整形面の確認できた8・9・10・11トレンチから推定することが可能であると考えられる。



Fig. 36. 10トレンチ全景(北西より)

IV. おわりに

山ノ鼻2号墳の墳丘調査は、墳丘規模と古墳の築造時期の確認を目的として実施した。しかしながら、墳丘は開削による削平が著しく、後円部墳丘上の埋葬主体部は消失していた。さらには、葺石や埴輪等の外部施設もない上に供獻遺物も何ら出土していない。従って得られた情報では、古墳の築造時期や古墳全体像を理解するには不十分な点が少なくない。ここではあきらかになった情報の範囲で復元を試み、今後に備えたい。

1. 墳丘について

古墳は、下谷古墳と若八幡宮古墳を載せた舌状丘陵に位置し、墳丘は山ノ鼻1号墳、若八幡宮古墳と同方向の配置を示す。今回の調査において、ほぼ確実に1段目の墳丘裾線を掘むことができたのは墳丘西側の8~14トレンチに限られる。墳丘の東側は隣接する農業用水池によって調査範囲が限定され、また、開墾による削平で墳丘東側基底面にほとんどが消失していた。そのため墳丘の復原には西側のトレンチを基に、その墳裾推定線は11~14トレンチの墳裾線を直線で結び、後円部の墳裾定線は8~11トレンチの墳裾線から後円部の中心点と半径を割り出した。

その結果、山ノ鼻2号墳の墳丘は、前方部が獣型に開き、後円部が墳頂に比べて大きめな墳形(Fig.7)であると推定される。また、東側に墳裾推定線を反転復原した結果、2トレンチと16トレンチの段落ち部分が推定線と一致し、これらの段落ちが墳丘築造時の地山整形の痕跡である可能性が考えられた。更に、12トレンチと13トレンチの墳裾線を結んだ延長線上に後円部の中心が位置することが判明し、墳丘築造時において一定の規格が存在したことが想定される。

このことを総合すれば、山ノ鼻2号墳の規模は全長75m、前方部長31.5m、前方部幅25.5m、くびれ部幅18m、後円部径51mに復原しうる。この規模は、糸島平野から今宿平野の前方後円墳の中ではやや大きな部類に属する。墳丘の軸線の方位はN-7°-Eで、前方部をほぼ真北に向ける。今回の調査によって復原した墳丘規模と従前の復元値との間には差異が生じ、従来の見解を見直す必要があるものと思われる。

一方、墳丘の構造については墳丘上部が大きく削平されており、築造時の状況を把握することは不可能である。類似する墳形をもつ古墳の墳丘築造状況から判断すると、前方部2段、後円部3段の段築をもつ可能性が高いと思われる。外部施設については、今回の調査で埴輪片、葺石等の外部施設は確認できなかった。

2. 今宿~糸島平野における山ノ鼻2号墳の位置付け

今宿平野の首長墓、すなわち前方後円墳の系譜は從来山ノ鼻1号墳-若八幡宮墳-鶴崎古墳-

丸隈山古墳という変遷が考えられていた。このうち最古期の古墳とされる山ノ鼻1号墳と山ノ鼻2号墳を比較した場合、前方部が撥型に開く2号墳は前方部が長く不定形な1号墳に比べて同時期かやや新しい様相を示しているのではないと考えられる。それからすれば山ノ鼻1、2号墳に南接する若八幡古墳の3基の古墳の築造は、山ノ鼻1号墳・2号墳—若八幡古墳となる。若八幡宮古墳の築造年代が4世紀後半に比定されており、山ノ鼻1号墳、2号墳はこれよりもやや先行する年代を与えることができよう。

糸島平野の外の前方後円墳と比較検討した場合、山ノ鼻2号墳のように撥型に開く前方部をもつ古墳には、三雲地区の端山古墳(全長77m)、井原1号墳(全長42m)、志摩半島部の御道具山古墳(全長65m)、長野川流域の木林崎古墳(全長25m)、などがある(推定も含む)。これらの古墳は、いずれも4世紀前半代のものと推定され、其々の地域(小平野)における前方後円墳現期のものであろうと考えられている。山ノ鼻2号墳は、これらの古墳群とはほぼ同時期のものと考えられ、前方後円墳出現期のものといえよう。また、このグループの其々の墳丘規模を考えた場合、今回の調査で墳丘全長75mを確認したことは、山ノ鼻2号墳が同時期の古墳群のなかでも遜色のない墳丘規模であることを証明するものである。

糸島平野に前方後円墳が出現した時期の同地域の古墳は、その地理的分布から数グループに分けることができる。山ノ鼻2号墳の属する今宿平野の一群と外の群との関係を観ていくと、前期段階の古墳については今宿平野の初期前方後円墳の分布が、その外の群に比べ数が少ないことが従来の編年で観られた。しかし、山ノ鼻2号墳の時期が従説より遅ることで、分布のアンバランスを解消でき、同時に糸島半島の各地域での前方後円墳出現期の状況をよみとることができよう。そしてその背景となる社会情勢を勘案すれば、該期の糸島平野を中心とした地域の首長権の在り方を考える一助となるであろう。

一方、首長墳の系譜という視点で観た場合、古式の前方後円墳が出現する時期の糸島平野は、同時期の古墳が並行して成立しており、それらの古墳が同一系統とは思われない関係にあるなどの事実がある。山ノ鼻2号墳を含む同時期の古墳に対し、首長墓を一つに限定することが難しい状況にあることから、少なくとも当該期においては今宿から糸島平野にまたがる統一首長権を想定することにはやや困難性があると云わざるを得ない。

なお、山ノ鼻2号墳を最古期に引き上げることによって、丸隈山古墳と今宿大塚古墳との間には若干の空白期が生じることとなる。しかし、1992(平成4)年2~3月に実施された伊都地区区画整理事業に伴う試掘調査では、飯氏二塚古墳の北100mの丘陵上で、全長50mを越える前方後円墳の周溝が確認されている。この古墳は、出土した埴輪片から5世紀代前半に位置づけられ、これをこの間に埋め得れば同一系譜上として位置づけられよう。

3. 山ノ鼻 2 号墳周辺の古墳立地状況について

山ノ鼻 2 号墳が立地する丘陵上には、尾根沿いに若八幡宮古墳、下谷古墳があり、また谷を挟んで山ノ鼻 1 号墳が近接する。古墳の築造順を考えると、最も古い山ノ鼻 1 号墳、2 号墳が丘陵の最も先端に位置し、そのすぐ背後に次に古い若八幡宮古墳が位置する。その背後には下谷古墳（横穴式石室と推定される）が位置し、更にその後背の山手には徳永古墳群を始めとする群集墳が点在する。このように古墳の築造時期と丘陵における位置関係を検討すると、まず丘陵の先端部に古期の古墳が占地し、山手の方により新しい古墳が並ぶ傾向がみられる。同一の尾根上に並ぶ古墳に、位置順と年代順の相關がみられることは、古墳の系譜関係をたどるうえで重要な意味合いを含んでいるものと考えられる。今後隣接する古墳群の調査による資料の増加が待たれる。

古墳の立地条件の点からは、最初に造営される古墳が最も立地条件を選定できることを勘案すると、最初に山ノ鼻 1 号墳、2 号墳は平野から直接眺めることができる丘陵の先端部に占地することを十分に意識したものと推察される。当時は、丘陵のすぐ近くまで内海が入り込んでおり、同地域は糸島水道の出入りに伴う海上交通の要衝であったことから、墳丘の容姿を誇示することを意図したものと推想される。

墳丘規格については詳報していないが、限られたデータのなかで墳丘の復原とその意義について考えてみた。本墳は、山ノ鼻 1 号墳のデータと相俟って今宿平野における形成期古墳の在り方の一様相を示す証左となりうるものである。今後の資料増加を待って更に検討を加えることが必要である。



Fig. 37. 山ノ鼻 1 号墳上空から 2 号墳、糸島平野を望む

福岡市埋蔵文化財調査報告書第353集

山ノ鼻2号墳

1993年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 赤坂印刷株式会社
